



書下ろし長篇伝奇推理

# みちのく誘拐殺人行

生田直親

*kosaido blue book*

みちのく誘拐殺人行

KOSAIDO BLUE BOOKS

著 者 生 田 直 親

発 行 者 足 立 貫 一

発 行 所 廣 濟 堂 出 版

〒105

東京都港区芝2-23-13

電話 03-453-1201 (代)

振替 東京8 164137番

印 刷 所 株式会社廣濟堂

©1987 生田直親

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-05268-0 C0293

# みちのく誘拐殺人行

---

## 生田直親







## 目次

---

|     |       |   |
|-----|-------|---|
| 序之章 | 最初の誘拐 | 8 |
|-----|-------|---|

---

|     |       |    |
|-----|-------|----|
| 壺之章 | 第二の誘拐 | 26 |
|-----|-------|----|

---

|     |         |    |
|-----|---------|----|
| 式之章 | 三億円の身代金 | 70 |
|-----|---------|----|

---

|     |         |     |
|-----|---------|-----|
| 参之章 | 金華山沖浪昏し | 154 |
|-----|---------|-----|

---



原田甲斐、刃傷の顛末

同月廿七日(寛文十一年三月)、安芸殿、外記、甲斐、志摩、内膳殿御宅へ相詰め候処、酒井雅楽頭御宅へ御城より直々御老中御寄合なられ候条、相詰め申すべき由にて、内膳殿御屋敷より雅楽頭殿御屋敷へ、乗物少々いそがせ参り、御門外にて何れも申し合ひ、御白州申すべく候間、刀持、草履取ばかりにて参るべく候由にて、其の通りに仕り罷り出で候、何れも相尋ねられ候以後、甲斐追つて申し上げ度き義これある由、大井新右衛門を以て相達し、罷り出づべき由御指図これあり、即ち、御帰り以後甲斐事、外記、志摩兩人合に着座致し候処、罷り立ち通り懸り、安芸殿を二腋指切り、安芸殿脇指抜き候までにて相果てられ候、直々御入へ翔け通り候二付、外記追い掛け、言を樹て切り結び候由、甲斐不義事終り、御老中御列座、嶋田出雲守殿、新右衛門殿出座、志摩召し出され様子相尋ねられ、志摩委細申し上ぐる由、私義、甲斐ころび候処へ参り懸り、首へ一脇指切り付け申し候、憚り多く候へ共、御目に懸くる由にて脇指を相出され候、御老中御覧、相返され候、(柴田外記留之写・伊達家文書)

## 序之章 最初の誘拐

伊達和義のところに女性の電話がかかってきたのは、午後五時の退社時間も間近な頃だった。

「お電話でございますが」

と秘書の声だった。

「だれだね？」

「お名前をおっしゃらないんです。若い女性の声で、副社長をお願いしますの一点ばりなんです」

「よし、つないでくれ」

ほどなく、相手が出た。

「もしもし、みちのく運輸副社長の伊達和義さんですか？」

東北弁をねじ伏せた女の声だった。

「ああ、伊達はわたしだが」

「奥さんをお預かりしています」

「なんだって？」

と和義はなんのことだかわからずに、反問した。

「いま、なんと言ったね？」

「奥さんの裕子さんを、預かっていると言ったんです」

「裕子を？」

かれの脳裏を、きょう、お能の稽古に行くと言っていた、若々しい裕子の面影がかすめた。

「あなた、どなたなんです？ 裕子を預かるというのはどういう意味なんですか」

「いま、奥さんの声をお聞かせしますから」

そして、突然という感じで裕子の悲鳴に近い声になった。

「ああ、やめて……！ いやっ、堪忍して……！」

「裕子、どうしたんだ裕子……！」

和義の声に応じて、妻の必死の叫びが聞こえた。

「ああ、あなた、助けて……裸にされて縛られて……」

いやらしいことばかり……おおっ、やめてちょうだい……！」

「裕子……！」

かれは動転した。

妻が白い裸身をさらして、男の手でもみくちやにされている光景が閃光のようにかすめた。裕子はまだ二十八歳である。四十二歳の男にとって若く瑞々しい妻だった。

仙台の実業家夫人の代表的美人として、地元業界誌をしばしば写真で飾っている自慢の妻といつてよかった。

「どういふことなんだ、これは……！」

和義は受話器に向かって絶叫した。

「もしもし、もしもし……なんだってそんなことを……説明してくれ、訳を言ってくれ……！」

すると、どす黒い感じの男の声になった。

「いい乳じゃねえか。子供を生んだことがねえだけに、こりこりと張っていやがる。いい手ざわりだぜ」

あきらかに、裕子の裸身をオモチャにしながらの、せせら笑いだった。

「左の乳房の下にあるホクロが可愛いじゃねえか。おうおう、嫌だ嫌だと言いながら、とんがってきやがった。気分出てきたのかい？ え？ 奥さんよ」  
それに対し、裕子の必死のあらがいの声も聞こえる。

「やめて、後生だからやめて……ああ、いやあつ！ やめてえっ……！」

「もしもし、もしもし、どういふ訳があるか知らないが、妻に乱暴はやめてくれ！ 話にのるから手荒な真似はしないでくれ……！」

だが、男の声はもつと残酷な光景を伝えてくる。

「ほれほれ、もつと足をひらくんだ。見せて減るもんじゃあるめえし、さんざんっぱら亭主を喜ばせてきたんだろう？ たまにはほかの男にもサービスするもんだ」

「いやっ！ いやあーっ！」

「いや、いや、言いながら、すっかり濡れているじやねえか。このド助平アマ、火のように熱くなっていやがって、指を食いちぎりそうに締めあげやがる」  
「やめて、そんなこと……ああ、やめてったら……！」

和義は目をつぶる思いだった。

近頃になって、ようやく女の歓びを獲得した若い妻の、ベッドの中で思いきり放恣な姿態をとる光景が浮かびでる。

「もしもし、だれか、まともに話し合う者はいないのか！ いったいこれはどういうわけなのか、ちゃんと説明してくれ……！」

「そう喚くなよ」

男の声が嬉しそうに笑った。

「どうやらこれで、あんたの奥さんのおかれた状況がわかったわけだ。つまり誘拐されて、すっ裸にされ、オモチャにされているってことなんだ」

「だれなんだ、きみは。なんのためにそんな真似を

する？」

「あまり利口じゃねえ質問だな。誘拐者が、どこそこのなになにだどと名乗るはずもねえだろうし、目的はもちろん金だ」

「金か？ いくらだ」

「仙台の名門伊達家の若奥さんだからな。失礼のない金額として、まず五千万円ってとこかな。すぐかき集めてくれ」

「無理だ。もう銀行も閉まっているし、それだけの大金を現金で集めるといふのは……」

「おいおい、ばかも休み休みにしろ。おめえんところは東北随一のバス会社で、運送のほうもやっているんだぜ。何百か所の営業所から、きょうの揚りをかき集めたってそのぐれえにはなるはずだ。そうだら、和義さんよ？」

「それは……」

と絶句する。

「……し、しかし、わたしは一介の副社長で、会社の金を右から左に動かすということは……」

「できねえ相談と言いてえのか？ 笑わしちやいけねえ。みちのく運輸は、社長はお飾りで、実権はあんたの女房の父親である会長の伊達熙和（だてじろかず）がにぎっていて、実務はあんたが一身で処理している……そうじゃなかったのかい？」

敵は周到に調べあげたうえでの作戦なのだ。下手にさからえないと身がまえた。

「どうだ、三時間の猶予をやる。古紙幣で五千万……ビタ一文負けねえから、そのつもりでな。……三時間後の八時ちようどにもう一度電話する。そのとき場所も指定するから、おめえ一人で持ってくるんだ。いいな？」

「わかった。全力をあげてみる。そのかわり妻に手を出さないと約束してくれ」

「安心しろよ。面白がっていたはずしているだけさ。だが、このことを警察に通報したら……奥さんがど

んなことになるか、保証はしねえぜ」

「わかつている。警察にはなにも言わないと約束する」

「よし、じゃあ金の工面（くめん）を急げ」

電話は、そこで切れた。

和義は、ただちに経理部長を呼びよせた。

そして絶対に口外しないことを約束させて事情をうちあげ、三時間以内に五千万円の金を用意してほしいと依頼した。

事の重大さに驚いた経理部長は、ただちに各営業所に連絡して、きょうの売り上げ金をそっくり本社に届けるように指示した。どの営業所も、その日の売り上げ金は午後五時すぎに取り引き銀行の行員が集金に来て、以後、最終バスまでの売り上げは夜間金庫を利用するシステムになっていた。

誘拐犯は、そういう社内事情まで調べあげたうえ、五時前に電話してきたものだった。

所定の金額は、午後七時過ぎには和義のデスクの

上に積みあげられ、経理部長の手で小型トラックにおさめられた。

「副社長、ほんとうに警察に知らせなくてもよろしいのですか？」

経理部長は不安そうに聞いた。

「金だけ奪って奥さまを返さない……そんなケースもないではないと思うのですが」

「相手が何者かわからないだけに、なんとも言えないが、一応、犯人の言うことを信用して取り引きしてみるほかはないと思うんだ」

伊達和義は四十二歳、第五百五十二銀行の支店長代理をしていたのを、才腕をみこまれて伊達家の婿養子となり、みちのく運輸の実務を任されていた。沈着、そして果敢、機をみるに敏な働きがかりの実業家といえた。

「ともかく会って交渉して、それでもラチがあかないとなったら、あらためて警察の力を借りる……そのほうが犯人を刺激しないと思うんだ」

それからの小一時間は、腹の中が煮えくりかえるように、いらだたしい内に過ぎていった。

午後八時ジャスト、犯人からの電話が鳴った。

「もしもし、伊達だが……」

「金を用意できたか」

「五千万、たしかに揃えた」

「じゃあ、おまえ一人で、車で持ってこい」

「場所はどこ？」

「ベニランドだ」

ベニランドは市の西南にある八木山動物公園に併設された遊園地である。

「わかった、すぐに出発する」

和義は電話を切って立ちあがった。

「お供いたしましょうか？」

経理部長がそう言ったが、和義は首を振った。

「一人で来いという指示だからね。ともかくベニランドに行ってみる。もし一時間たっても帰ってこなかったら、警察に連絡してくれ」

「わかりました。くれぐれもお気をつけて」

和義は小型トランクを持って副社長室を出た。経理部長がついてきた。

エレベーターで地下の駐車場に出た。

愛車のリンカーン・コンチネンタル・マーク6に乗りこむ。

「どうか、充分にお気をつけて」

経理部長の会釈に送りだされて、勾当台の本社を後にした。

勾当台は、県庁、市役所、合同庁舎等がある仙台の官庁街である。ケヤキ並木の定禪寺通りは中央の分離帯が公園通りになっていて、彫像などがおかれた小粋な散策路になっている。ここを西に行けば、やがて市民会館にぶつかる。

左折して西公園通りを南下する。この通りと広瀬川とのあいだは桜が岡公園、西公園とつづいていて、いかにも杜の都にふさわしい緑の濃さを誇っている。七月末の濃密な温気が木立のあいだに凝縮している

気配だったが、クーラーを効かせた車内はあくまで涼やかだった。

西公園前を右折して大橋を渡る。

これは青葉城正面の橋で、築城と同時に架けられた家臣登城用の橋だった。橋の袂には橋番所が設けられ、町人、農民、他国者の通行を監視し、河原には追い廻しと呼ばれる桜の馬場があつて、伊達政宗もここで馬を乗りまわしたという。

渡ればすぐ三の丸跡に建つ博物館前であり、そこを過ぎて、青葉城公園前の大手門を左折して青葉山の急坂を登る。

標高一四四メートルながら、中腹にある本丸跡は仙台市内を眼下に、遠く太平洋上の金華山まで望めるといふ眺望を有し、東に広い広瀬川、南に急峻な竜ノ口溪谷を天然の外壕に見たてて、青葉城を築いた政宗の意図は賢明であることがわかる。

伊達六十二万石、実質百万石とも百五十万石ともいわれる東北の雄藩の居城跡も、現在はツタを這わ



